

年間第二主日 1月第3週説教 2014.1.19

## 神の子羊

ヨハネ1章29-34節

(そのとき、)ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」

## 説教

<終わりは始まり、始まりは終わり>

終わるといふことは始まるということ、きょうのテキストはイエス揺籃期(ようらんき)の終わり、そしてイエス・キリスト福音の始まりです。こんなきどった言い方より「福音のヒント」(注1)に上手にまとめてあるので以下引用します。

<福音のヒントから>

「年間主日」のミサの福音は、福音を告げるイエスの活動の歩みを追っていきます。3年周期でマタイ、マルコ、ルカ福音書、共観福音書(注2)が読まれ、ヨハネ福音書は主に四旬節や復活節に読まれるようになっています。ところで、ヨハネ福音書でイエスの最初期の活動を伝える部分は他に読む日がない

ので、年間第2主日に読まれることになっているのです。もちろん、成人したイエスの話ですが、ここに「神の子の栄光の現れ」という降誕節のテーマの余韻を感じ取ることもできるでしょう。なお、日本語で「公現」と訳されているラテン語の「エピファニア epiphania」(元のギリシア語では「エピファネイア epiphaneia」)は、もともと「現れること」、特に「神の現れ」を表す言葉です。

### <神の子羊> (注3)

「洗礼を受ける⇒聖霊がくだる⇒天からの声が聞こえる」主の洗礼の記録を共観福音書は多少の違いはありますがこのように洗礼・聖霊・召命の三段階で現します。見方によってはけっこう単純化・図式化したイエス洗礼の記録です。それに対してヨハネ福音書はちょっと複雑、ややこしくなっています。まずヨハネのテキストにはイエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたという記述がありません。そのかわりに3章でイエスが洗礼を授けていたという記事をおき、イエスがヨハネから洗礼を受けたことが暗示されます。(ヨハネ3:32-4:2) またイエスに聖霊がくだったことは共観福音書ではただちにイエスにおきた出来事として記述されますが、ヨハネ福音書では洗礼者ヨハネが神から受けた預言の実現として、ヨハネが目撃したキリスト証言となっています。ヨハネ福音書はイエスの行動を直接記録するのではなく、その意味をあらわしているといわれます。逆の言い方をすれば実際とは違うイエス像を描いているということです。ところで、わたしたちは現実はその単純ではないことを実感として持っています。その意味ではちょっとわかりづらいヨハネ福音書に現実が投影されているのかもしれない。

きょうのテキストはこのように要約することもできます。

ある時イエスはヨハネから洗礼を受けた。大勢に洗礼を授けるなかの一人であったのでヨハネはイエスのことをよく憶えてはいなかった。いく日かたつてヨハネは再びイエスの姿を見て、刮目(かつもく)して「神の子羊」と称

号で呼びました、つづけて「“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た」からだと言います。

### <ヨハネ福音書の七日間>

朗読では（そのとき）と読みましたが、1章29節は「その翌日」と始まります。この「その翌日」は1章でつごう3回でできます。一週間にたとえるなら1章は初めのことば（序詞1章1-18節）に続いて、月・火・水・木の四日間の記録となります。この区分で分けると、きょうテキストは火曜日、第二日の出来事です。

**三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。（ヨハネ2:1）**

また、この2章冒頭の「三日目」を足すと7日、ちょうど一週間になります。この足し算から、ヨハネ福音書の冒頭部分は受難の7日間と比較されたり、天地創造の7日間になぞらえられたりします。

**神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。（創世記1:6-8）**

天地創造の第二日です。なんか似ているような似ていないような、今日のテキストとつながりをみなさんそれぞれにイメージして見てください。

### <福神漬け>

ある人たちはクリスチャンを見分けることができるそうです。クリスチャンには聖霊がいるので分かるのだそうです。

さて、たびたびですが興味深かったのでまた「福音のヒント」からの引用をします。

「洗礼を授ける(バプティゾー baptizo)」を「漬ける」と訳した人がいます。

「聖霊によって洗礼を授ける」は「聖霊漬けにする」と言ってもよいかもしれませんが。「福神漬け」というのは、七福神のようにさまざまな野菜が1つ

の漬物になっているからそういう名前になったそうです。福神漬けの中に入っている野菜が、それぞれの個性を失わず、それぞれの野菜のままでありながら、すべての野菜が福神漬けになっている、というイメージを思い浮かべてみてはどうでしょうか。「一人一人が聖霊の香りを放つ者になる」と言ってもよいかもしれませんが。わたしたちが「聖霊漬け」になるというのは…？

(ということで、きょうは…？でおしまいになります)

注1：「福音のヒント」<http://tokyocatholic.cocolog-nifty.com/blog/2014/01/2-2014119-129-3.html#more> は毎週の聖書日課の解説のページです。以前も紹介しましたがとても参考になるので再度紹介します。

注2：共観福音書（きょうかんふくいんしょ）は、キリスト教の新約聖書の四つの福音書のうち、ヨハネ伝を除くマタイ伝、マルコ伝、ルカ伝のことを指す。この3つには共通する記述が多く、同じような表現もみられる。聖書学の研究の結果、本文を相互に比較し、一覧にした共観表（シノプシス synopsis）が作られたことから共観福音書と呼ぶようになった。（ウィキペディア・フリー百科事典より）

注3：神の子羊（神の小羊、かみのこひつじ）は、イエス・キリストのことを指す表現のひとつ。キリスト教神学において、人間の罪に対する贖いとして、イエスが生贄の役割を果たすことを踏まえており、古代ユダヤ教の生贄の習慣にも由来する表現である。ラテン語では「Agnus Dei」と表記され、日本語では、ラテン語やイタリア語などの用法に由来するものは「アニユス・デイ」、ドイツ語での用法に由来するものは「アグヌス・デイ」と片仮名書きされることが多い。この表現は、聖書に見えるいくつかの異なる用例のいずれかへの言及として用いられる。以上はウィキペディア・フリー百科事典より。

わたしたちの礼拝の最後の歌はアニユス・デイです。これを歌えばあとは拝領と祝祷だけ、長い礼拝も終わりです。礼拝はキリエで始まり「世の罪を除く神の小羊よ、憐れみをお与えください、世の罪を除く神の小羊よ、主の平安をお与えください」アニユス・デイで終わります。